

高次脳機能障害児の認知特性評価の検討

場面を限定した PASS 評定尺度を用いた検討

○岡崎慎治

(筑波大学人間系)

武村知保

(筑波大学心理・発達教育相談室)

KEY WORDS: 高次脳機能障害, 問題解決, 知能の PASS モデル

1. 問題と目的

小児期の疾病や外傷による脳機能障害（高次脳機能障害）のある子どもへの支援は特別支援教育体制の中で行われてきている。高次脳機能障害児への支援は発達障害者支援法に定められる発達障害への支援の枠組みが援用されてきており、合理的配慮等の支援の進展とともに支援の必要性が指摘されてきている。近年では医療、看護、教育、心理等の連携やそれぞれの領域での支援が報告されてきている（小室, 2016）。

一方、高次脳機能障害にみられる記憶障害や言語障害、注意障害等の症状は、受傷時期によって様相が異なるものの、発達障害としての特徴と中途障害としての特徴とが混在した状態像を示すこと等を考慮した支援の観点も必要といえる。それら個別性の高い支援に資するアセスメントならびに支援の観点として、知的能力を4つの認知プロセス（P：プランニング、A：注意、S：同時処理、S：継次処理）と想定する、知能の PASS モデルが挙げられる。このうちプランニングと注意の概念は、高次脳機能障害において支援が必要となることが多い注意障害、記憶障害、遂行機能（実行機能）障害・発動性（自発性）低下、脱抑制、感情コントロール困難といった状態にある程度対応するものといえる。

知能の PASS モデルに基づく特性評価のツールとしてダス・ナグリエリ認知評価システム（DN-CAS 認知評価システム）が挙げられるが、より簡便な評価のための評定尺度として PASS 評定尺度（PASS Rating Scale; PRS）が挙げられる。PRS は PASS モデルの構成要素の個人内差を推定することを目的としており、4つの構成要素に対応する6つずつの質問項目に「よくある」「ある」「たまにある」「ない」で回答を求める。指導支援を行う上での実態把握とともに、指導支援の前後で子どもの質的な変化を確認するために用いることができる。

本報告では高次脳機能障害のある女兒2名を対象に、担当教師に場面を限定した PRS の記入を依頼し、その結果の解釈を通して教育相談ならびに学校等の日常生活場面における指導、支援に有用な情報を得るための検討を行った。選定する場面はそれぞれの対象児が比較的興味関心のある活動である調理や食事前後の場面とした。

2. 方法

指導開始時に通常小学校の知的障害特別支援学級に在籍する6年生女兒（A児）ならびに通常中学校の知的障害特別支援学級在籍の1年生女兒（B児）を対象とした。

A児は生後6ヶ月時にインフルエンザ脳症に罹患、B児は生後2週間でウイルス性脳炎に罹患し、それぞれ医療機関にて脳炎後遺症としての知的発達障害の診断を受けていた。

C大学の教育相談に月1回程度の頻度で来談する中で、以下の気になる点について保護者からの情報聴取ならびに行動観察を行った。

・A児：興味関心があるものが特定しづらい。自分の経験したことのあるパターン課題や活動を選びがちで、余暇的な活動（遊び）でも楽しみとしてではなく疲労に繋がってしまう、持続的な仕事につながらない。

・B児：ファッション等興味関心が向けられる活動はあるものの転導性や記憶保持の困難が目立つ。コミュニケーションがとれないわけではないものの、理解の伴わない表面上のやり取りをしやすい。そのため本人の困り感や深刻さが周囲（特に支援者）に伝わりにくく、援助の必要性（本人の苦手なこと）が支援者の気づきにつながりにくい。

等が指摘できた。これらのことをふまえ、指導前にそれぞれの特別支援学級担任に PRS への記入を依頼した。PRS の質問項目は、家庭科の調理や、給食などの食べる活動に伴う準備や片付けといった一連の活動について尋ねる内容に一部記載の変更を行ったものを用いた。

各対象児の保護者に承諾を得て、担当教員に郵送にて質問紙を送付、回収した。

3. 結果と考察

A児、B児とも、担当教員による PRS の結果は、他の3つに対して「プランニング」の得点が低かった。このことは、興味や経験を伴う活動でもやり方や手順を考えることには課題があることを示していると考えられた。

一方、残り3つの構成要素のプロフィールは対象児間で異なった。A児は「同時処理」「注意」「継次処理」は同得点であったが、各構成要素に含まれる一つ一つの質問の中では「同時処理」と「継次処理」では「よくある」ものもある一方で「たまにある」ものもありバラつきが大きいものに対し、「注意」は全体的に「ある」結果で、興味関心や経験を伴う活動に注意を向けることそのものはできること、活動の内容によって（見通しが持ちやすい、パターンや順序が決まっている）力を発揮しやすいものがあることがうかがえた。B児は「同時処理」に対して「継次処理」が低く、一つ一つの質問の中ではどちらに関しても「よくある」ものがある一方で「たまにある」ものもありバラつきが大きかった。このことから、活動の内容によって（見通しが持ちやすい、パターンや順序が決まっている）できること、できないことが左右されがちなことうかがえた。また、「注意」は全体的に「ある」結果で、興味関心や経験を伴う活動には注意を向ける、集中するといった力を発揮しやすいことがうかがえた。

以上から、場面を限定した PRS による特性評価を通して、比較的興味や関心のある活動においては注意障害として指摘されること多い「注意」の問題は相対的に目立たないこと、一方で前頭葉機能障害に相当する「プランニング」の困難は目立つことが推察できた。あわせて、「同時処理」と「継次処理」を含めた個々の対象児のプロフィールの解釈の過程において、困難に対する支援方針立案のための情報が得られることが示唆された。これらの認知特性評価と解釈について保護者とも情報共有し、実際の指導・支援への適用について引き続き検討することが必要と考えられた。

【文献】小室佳文（編）（2016）高次脳機能障害のある子どもへの支援。小児看護 2016年12月号，へるす出版。（OKAZAKI Shinji, TAKEMURA Chiho）